

公開シンポジウム これからのグローバル社会を生きる：

現役学生の視点から

吉田裕美（岡山大学）

概要

グローバル社会で活躍できる人材を育成するために、小学校から大学レベルまで様々な取り組みが行われてきている。しかしながら、どのような人材を育成すべきかについては多様な意見が混在し、現場で学生に指導する際に戸惑うことが珍しくない。そこで、今一度グローバル人材とは何かを問い直す機会として、本シンポジウムを計画した。本シンポジウムの目的は、模範的なグローバル人材像を確立するのではなく、活発な意見交換を通じて、グローバル社会を生きる参加者全員が様々な視点を学び、それぞれの意見に理解を深めるような場にあることである。本シンポジウムは二部構成となっており、第一部は現役学生の発表とゲスト・スピーカーの講演、第二部は学生たちとゲスト・スピーカーのディスカッション、その後会場のオーディエンスからの質問に答える形で進んだ。

本シンポジウムに先立ち、登壇する学生たちには、発表の中で次の問いに触れるよう依頼した。①グローバル人材とは何か ②どのようなグローバル経験をしてきたか ③自分の経験から得たものは何か ④その経験を、どのように社会に貢献していきたいか、の4点である。「グローバル人材」や「グローバル経験」をどのように解釈しているのか、またその枠組みの中で自分たちをどのように位置づけるのかを自由に語ってもらうために、あえてこちらからの定義を伝えなかった。

グローバル人材について、学生たちは自らの経験で得た気づきに基づき、自分の言葉を使いながらそれぞれに語ってくれた。多様な価値観が交差する社会において、自国の文化と共に異文化への深い理解を持てる人間。己に対する冷静なまなざしと共に、希望を持って前に進んでいく勇氣を持った人間。彼らの留学やインターンシップといった経験は、戸惑う時間を過ごし、もがき苦しんだ先に得たポジティブな経験として語られた。学生発表の中で、自分の成長だけを強調するのではなく、成長の過程にあった他者との関わりや周囲への感謝を言及していた姿が非常に印象に残った。

ゲスト・スピーカーの河合友弘氏には、まず簡単にライフストーリーをお話いただいた。そして、ご自身の考えるグローバル人材に求められるもの、グローバル社会に必要な教養力について語っていただいた。幼少期から外国の方々との接する機会が多かったことが、異文化や外国語を身近なものとして捉えていた様子が伺えた。また、日本と海外をトランスナショナルに行き来するビジネスマンとして、ニーズを知るために人々の意見に慎重に耳を傾け、地域の独自性を尊重し、要求に対してその場その場で柔軟に対応していくこと、それらは他者への理解や異文化に対する柔軟性や寛容性、そして地域独特の文化を大切にすることというスキルが大事、といった言葉に経験者としての重みを感じた。教養力に関しては、グローバルに関わって生活する全ての人々が多文化に触れることは重要とした上で、学問としてのみ接するのではなく、旅行や人々の出会いといった体験を積む重要性が指摘されていた。

会場のオーディエンスから様々なコメントや質問があり、全体を通じて個々の考えるグローバル人材にはかなり開きがあることが改めて浮彫になった。しかし、グローバル人材育成という潮流の中で、学生たちがグローバルに活躍する「誰か」になるのではなく、今までの自分たちの延長線上にいる自分なりのグローバル人材像を模索し続けていることは興味深かった。留学や海外インターンシップを経験して、慣れ親しんだ日常から離れて自分自身を等身大に捉えなおすことから、その一歩が始まったのだと強く感じられた。

JAILA シンポジウム

■ゲスト・スピーカー

河合 友弘 ポタジェ・アジア・パシフィック代表取締役

野菜スイーツ事業を展開する日本ボタジエブランドおよびそのプロジェクトを、香港ベースでアジア太平洋地域に橋渡しする役割を担う。

■発表者の概要まとめ

岡山大学

中島悠希 法学部・法学科 4年

発表要旨：グローバル人材とは、「和魂洋才」だと表現したい。洋才の「洋」には、欧米だけではなく、近年発展を続けるアジアやアフリカなども含まれる。専門性や語学力といった「才」を磨くだけではなく、海外で身に付けたことを、日本のため、世界のために役立てようとする気概を有した人間のことでないか。私は、大学の交換留学制度を利用して、タイのマヒドン大学と、アメリカのカリフォルニア州立大学で1セメスターずつ学んだ。帰国後は学内にて、留学アドバイザーとして生徒目線の留学サポートに従事している。アジアとアメリカの二カ国を経験させて頂いた身として、発展途上のアジアの一員でありながらも、欧米諸国と同様、先進国でもある「日本」の立ち位置に着目し、日本人としてどうあるべきかを常に考える人間を目指したい。

山根卓大 理学部・生物学科 4年

発表要旨：グローバル人材とは自分の国を深く理解していると同時に、他の国の価値観、制度を受け入れられる人であると私は考える。私はアメリカ合衆国のカリフォルニア州におよそ1年間交換留学し、アメリカの制度、価値観に触れることができた。アメリカは人種のもつとと言われるように実に様々な国の人がいる。それぞれ異なった背景を持つ人々が英語という言葉を用いて共に生活し、国を形成している。皆違う、それが当たり前。Be yourself という視点を得た。将来日本で働くのであれば、アメリカの、海外で働くのであれば日本(とアメリカ)の、制度、視点をその国にうまく取り入れることでよりよいものを作りだすことができればと思っている。

渋谷直樹 環境理工学部・環境間理工学科 1年

発表要旨：発表要旨：私は、2014年8月1日から8月7日に渡ってカンボジアのプノンペンにて開催された「第5回国際学生リーダーシンポジウム」に参加した。このシンポジウムの開催趣旨は「持続可能な社会を目指し、世界で貢献する次世代リーダーの育成」で、主にスピーチ、ボランティア、国際交流で成り立っている。そしてこのシンポジウムには、世界中から約700人の全く異なった文化・宗教を持った学生が集まりとても国際色豊かなシンポジウムとなった。今回は、グローバル人材とは「ただ英語が堪能に話せる人」という以前の自分の考えから、ここでの経験を通して、どのような新たな視点を得られたかをお話したい。

同志社大学

門澤愛 グローバル・コミュニケーション学部・グローバル・コミュニケーション学科・英語コース 4年

発表要旨：グローバル人材とは、自分の属する組織や地域に限定することなく様々な方面から情報を集め、その中で何が正しいかを自らで考えて行動できる人材のことを指すと私は考える。その考えに至った背景には色々な経験があるが、一番印象に残っているのは高校時代のアメリカ留学である。そこで私は日本で普通と考えられている生活だけではなく、それまでは考えつかなかった人生の選択肢があることを知り、その後の自分の生き方を考え始めるきっかけになった。私はこれから仕事を通して、世界の人々の生活に選択肢を増やし、誰もが自分らしい選択をしながら生きられる社会づくりに貢献したいと考えている。

環太平洋大学

安東大樹 次世代教育学部・国際教育学科 3年

村木寛正 次世代教育学部・国際教育学科 3年

鷲北祐輔 次世代教育学部・国際教育学科 3年

発表要旨(3名合同): 今回のシンポジウムにおいて、IPU 環太平洋大学次世代教育学部国際教育学科の1期生で3年生である私たちは、初年次でのニュージーランドへの留学、帰国後の大学内外での様々な経験、経験をとおし考えるグローバル人材の素養、そして自分たちが今そして将来できる社会貢献について、チームとして発表していきたい。まずは留学と留学後の経験について話しをしたい。私たちは初年次にニュージーランドにあるIPC・インターナショナルパシフィックカレッジに1年間の留学を経験した。30カ国から学生・教員が集っているIPCでは多文化を学ぶことが出来たのと同時に、「好きだが苦手」だった英語を基礎から勉強する事が出来た。しかし帰国した2年次には大学の授業スタイルの違いに戸惑い、英語力が思うように伸びず、日々悩む日々が続いた。しかし3年次には東京の外資系ホテルでのインターンシップ、学生が主体で運営する小学生対象の塾の開講など学内外での様々な経験や体験を得て、自分たちの進みたい道が見えてきたような気がした。3年次でのインターンシップや塾運営を通して、コミュニケーション力、行動力、チームワーキング力、創造力、失敗を恐れず課題を乗り越えていく精神力、常に新しい事に挑戦する実行力などが必要であることを実感した。これらは「グローバル人材」が備えるべき技能・能力とも共通するのではないだろうか。インターンシップや塾運営の実際の経験を話しながら、私たちが思う「グローバル人材の素養」について発表したい。最後に、インターンシップや塾運営の経験に加えて、東北復興のボランティアや留学生との国際交流、大学のイベントを通じた地域貢献などの経験などから、4月に4年生になる私たちが大学の最後の年に出来る事、また卒業後にどのように社会に貢献していきたいか、現時点での私たちの考えを発表できればと思っている。